

『食の歴史』

人類はこれまで何を食べてきたのか』

ジャック・アタリ 著

国際領域 主任研究官 上林 篤幸

「私は親しい人たちとあれこれ語り合いながら食事をするのが好きだ」。この前書き冒頭の一文を読んで複雑な気持ちを覚えるのはおそらく評者だけではないでしょう。本書が日本で発売された2020年2月はまさにコロナ禍の始まりで、以来評者の外食の機会はほとんど無くなりました。

ジャック・アタリ氏はフランスの経済学者・思想家です。同氏はアカデミズムの世界にとどまらず、ミッテラン政権以来現在のマクロン政権に至るまで仏政権の中枢に深く関わり、政策アドバイザーとして重要な役割を果たしてきました。現在「ヨーロッパ最高の知性」と評される存在です。既に音楽、テクノロジー、海など広範なテーマに関する歴史を対象とした数々の著作を発表してきました。

これらの「歴史」シリーズの著作では、(1) 冒頭でこれらの本を書く目的は「未来の展望」であることを述べます。(2) 次にそれぞれのテーマの過去から現在に至る歴史の流れを叙述します。(3) さらに現状分析により問題点を抽出します。(4) 最後に、これらの問題点の放置から生じる未来についての悲観的な予測シナリオを提示した上で、そうならないために我々はどのように行動すべきかについてのいくつかのアイデアを提案する、という一貫した構成がとられています。

第1章から第8章までは230万年前の最初のヒト属と見なされる「ホモ・ハビリス」から現在に至るまでの人類の「食」の歴史が書かれています。農耕の開始、新大陸発見による食材の多様化、そして洗練された料理と対照的なジャンクフードが併存する現在の「食」の問題点などに関し、社会、文化、経済、栄養学等を切り口として縦横無尽に論じています。

本書の中核は第9章「監視された沈黙のなかでの個食」及び最終章「食べることは重要なのか」です。第9章では悲観的な「食」の未来、すなわちAIが個々人の健康状態をモニタリングして食事内容を監視する「沈黙型超自己監視食生活」が到来し、飽くなき利益を追求する大企業が開発した「スマートフード」、すなわち「完全栄養」ではあるものの食事の時間を最小限にするための粉末食や液状食が普及するだろうと予言しています。「人々は物静かなAIロボットと共に個食することにより、会話の最も

素晴らしい課題である「食」も、議論の最良の場である会食の機会も失う」という悲観的シナリオが提示されています。

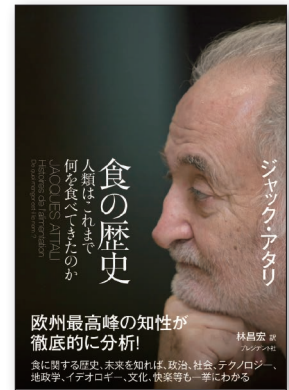
最終章では、このような「沈黙型超自己監視食生活」の到来を避けるた

めの日常生活の抜本的な改革が提案されています。「スマートフード」を人々に強制する貪欲な大企業への規制を大幅に強化するとともに、小規模農家との共存による地産地消、スローフード、食育などを通じ、社会でも家庭でも意見を交わし談笑する時間を食卓に見いだすことが重要である、と述べています。

「悲観シナリオ」の洞察や最終章のそれを避けるための提案の内容はそれほど目新しいものではありませんが、それらの提案が示す望ましい「食」の未来への方向性については、フランスや日本のように長い伝統文化としての「食」の歴史を有する国々のみならず、グローバルに共感・共有が可能なテーマでしょう。しかし現実の世界はますます余裕を失いつつあります。世界経済の成長鈍化と格差の拡大により「食べるために生きる」ことができる人々よりも、貧困のために「生きるためだけに食べる」、さらに「満足に食べられない」人々が年々増加してきており、経済格差に起因する「食の貧困」が進行中です。

憂鬱な「食」の未来の到来を阻止するためには、まず万人の経済的基盤の確立を可能にする適切な社会経済政策とともにコロナを制御する保健医療政策が何よりも必要ですが、これらは政策担当者が一朝一夕に解決できるような性格のものではない非常に困難な課題です。

一方、「食の貧困」と同様に深刻な問題である、「飽食」がもたらす(1) 環境への過重な負担、(2) 資源の浪費、及び(3) 糖分や脂肪分の過剰摂取による健康への悪影響、についての筆者の警告は鋭利です。本書は単に過去から現在に至る歴史の記録ではありません。健康的かつ持続可能な「食」へ向けての問題提起は刮目すべき論点を含んでおり、万人向け教養書にとどまらず「食」に関わる全てのステイクホルダーにとって必読の書です。



『食の歴史 人類はこれまで何を食べてきたのか』

著者/ジャック・アタリ (林昌宏 訳)

出版年/2020年

発行所/プレジデント社